

岩手県焼石連峰におけるクマゲラ生息調査

調査者：籠島恵介（本州産クマゲラ研究会）

1. 調査の必要性

本州産クマゲラはブナ林への依存性が高いという特異的な生態があり、北海道個体群との交流が無いとも言われていることから個体群としての全体像が不明である。

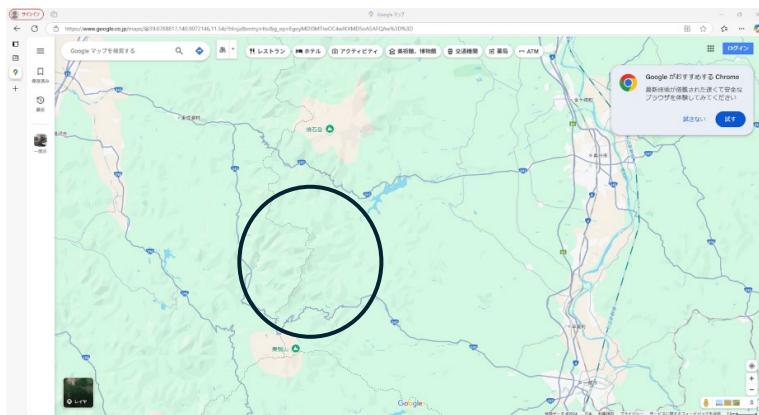


図1：焼石連峰周辺図

本州でクマゲラの繁殖が確認された場所は4か所あり、本州産クマゲラ研究会は白神山地及び森吉山を中心に生態調査を行ってきた。

また東北各地で分散個体らしきものも確認されている。特に岩手県南部に位置する焼石連峰では巣穴が15ヶ所発見されている。ねぐら穴の可能性もあるため繁殖の証拠ではないが、目撃事例は少なくとも11例あり、5か所目の繁殖場所の可能性がある。



図2：古い巣穴

この山域でクマゲラの繁殖が確認された場合、南限域が広がり生物学的に興味深い。また、山域一帯に南部個体群が存在するならば北東北との間にコリドーが存在することになり、環境保全の観点からも重要な発見になるであろう。発見されたねぐら穴は皆伐地に母樹として残され成長した樹木であり、これは20世紀の低標高ブナ林の皆伐により駆逐されたクマゲラが本来の生息地に戻る兆しなのかもしれない。

しかし、このエリアでもゼネコンによる地熱発電の計画があり、クマゲラの保全に必要があれば異議を唱えるためにも調査が必要である。

2. これまでの調査

本調査地においては80年代から目撃及び巣穴発見の情報があった。2022年には巣立ちびなの目撃情報があったことから、コールバック（以下、CB）調査を始め、2024年秋に初めて反応があった。その結果を踏まえ、2025年に発見場所周辺の3箇所に録音機を設置し得られた約165時間の録音データを人工知能BirdNetで分析したがクマゲラの音声はなかった。

ただし、反応がなかったことは、本地域にクマゲラが不在であることを意味するものではなく、本種の低密度性や検出確率の低さが要因である可能性がある。したがって、本結果は「個体群が成立していない」とことを示すものではなく、検出方法の改良と調査範囲の再検討が必要である。

3. 2026年に予定している調査

- (1) 調査開始までにメインとなるキャー音以外のクマゲラの声を学習させ、2025年の調査で採取したセミの声、雨音、そして他の鳥の声などの環境雑音を人工知能に学習させ、発見精度を高める。また、夕暮れ時にタイマーをセットするなど経験を踏まえて発見確率を高める。
- (2) 2025年に調査した場所では繁殖の可能性は少ないと判断し、2022年の巣立ちびな発見場所から数km以内の繁殖適地を本州産クマゲラ研究会のメンバーの意見を参考にして、グーグルアース等で探し、3か所を選定した。なお繁殖適地とは標高650m以下で、平地があり、胸高直径70cmのブナがある可能性が高く、そして低層木が繁茂していない場所である。
- (3) 2026年の雪解け後の4月下旬、上記3か所の近くに録音機を設置する。翌日、No.1地点の巣穴調査を実施する。
- (4) 5月下旬から6月上旬にメモリー及びバッテリー交換を行い、その日のうちにデータの分析をしてクマゲラの音声が入った場合は、翌日にその場所周辺の巣穴調査を行う。入っていなければ、No.2地点周辺の巣穴調査を行う。
- (5) 6月下旬から7月上旬にすべての機材を回収し、その日のうちにデータの分析を行う。クマゲラの音声が入った場合は、翌日にその場所の周辺で巣穴を探す。入っていなければ翌日にNo.3地点周辺の巣穴調査を行う。また育雛期が終わって繁殖攪乱の恐れがないことから、家族期の個体を狙ってCB調査を実施する。
- (6) 8月以降は家族群が散開していて発見できたとしても分散個体の可能性が高いため、その後の調査は原則として行わない。しかし(3)から(4)の調査でクマゲラの音声が入っていた場合はその場所周辺の巣穴調査を行うこともある。

4. 支援金の用途

交通費、コールバック調査用の500m届く効率の良いスピーカー、録音機に使用するモバイルバッテリー、調査中に使う防虫剤などの消耗品類などに使用させていただきます。